

藤商事 創立60周年記念特別インタビュー

松下智人

代表取締役社長



MATSUSITA TOMOTO

——創立60周年、おめでとうございます。はじめに松下社長と藤商事の出会いから教えてください。

松下 1989年に新卒で藤商事に入社しました。今年で38年目になります。学生時代に友だちとよくパチンコを打っていたんです。当時は羽根モノとフィーバー機が全盛の時代。当たったときの嬉しさや、ニヤニヤできる面白さは、ゲームセンターなど当時の娯楽では体験したことがありませんでした。そのなかでも藤商事の『シャトル21』というアレンジボールに強く惹かれました。あまりに好きで、逆の立場になってパチンコを作り、お客さんの笑顔を見てみたい。「この機械、面白い

「ファンファースト」で 業界の未来を拓く

今年10月に会社創立60周年を迎える藤商事。「ヒト味違う“オモシロ”さ」で半世紀以上にわたり遊技機を創り続けてきたメーカーはいま、何を考え、どこに向かっているのか。今年4月に代表取締役社長に就任した、生え抜きの松下智人さんが描く未来を聞いた。

ね」と言ってもらいたい。ただ、その思いだけで「どうしても藤商事で働きたい」と面接を受けたのです。

——面接では何をアピールしましたか。

松下 開発の面接で「うちは即戦力が欲しい。何か機械を作った実績はありますか」と聞かれました。そこで「日曜大工店で合板と真鍮釘を買ってきて、『スーパークンビ』の入賞穴を真似して遊んだことがあります」と答えたら、「変わってるな」と言われました（笑）。当時の藤商事は社員数が70人ほど。開発部門を希望していましたが、開発部門の面接後に営業部門の面接も受け、

最後に「本社で人手が必要だから、本社勤務で明日から来てほしい」と言われ、本社での管理業務からスタートしました。

——本社ではどんな仕事を？

松下 当時の本社ではしか部署がなく、ホール様向けの送など、本当にさきしました。それでもっと持ち続けてい間が空けば開発へり、開発中の機械をしていました。そ（1992年）や「エ

続きはデジタルブックで
ご覧いただけます。

詳細はこちら▶